

んなに大きいから絶対に大丈夫だ」と思った時点でアウトですね。川の水が溢れ始めると堤防なんて脆いものです。川の近くであれば、やはり水害というのを考えておかなければなりません。最近ではハザードマップ等もほとんど作成されており、土石流の危険領域などを知ることができます。是非、地域の危険というものを自ら積極的に知ろうとする努力をしてください。そして、先ほど三つの災害例を見ていただきましたが、自らの身を守る知恵というものを持つことも大切です。最終的には、避難勧告が出ても出なくても、とにかく「今、自分はこれでいいのか。この状態の中で留まっているのか、もしくは逃げるほうがいいのか」を自分で判断するという非常に主体的な防災意識が必要なのです。

■津波被害と防災教育

さて、次は地域には固有の危険があるというお話です。その典型的な例として、津波を例にお話ししたいと思います。

岩手県の田老町や釜石市などの三陸沿岸では、「明治三陸津波」で二万人以上が亡くなるなど繰り返し津波被害を受けています。よりは避難率は高く二七%でした。それでも、北海道全体では一三%しか逃げていません。

約二カ月後、また同じ震源で津波警報が出ました。ところが、この時の避難率は四・七%とさらに低くなってしまいました(図2参照)。一方、オホーツクの場合は、初めての津波警報で実際には津波が来なかったこともあり、今度は一〇%まで落ちてしまいました。一回の空振りがこんなにも避難率を下げてしまったのです。

実はこの二回目の津波警報時にも津波は来なかったのですが、この状態で、もし次に津波を伴うような揺れがあった時に彼らは逃げるでしょうか。絶対に逃げませんよね。ところが地域の住民は「その時は逃げる」と言うのです。しかし、なぜ「その時だけ逃げられる」と言えるのでしょうか。

防災面において最大の敵は、豪雨や津波よりも、何よりも「自分自身」なのです。ここで、この地域の住民の心を考えて見ます。あるおじいさんを例にしましょう。「また、外れよった」と二回目に逃げ、「また外れよった」とまた、これを繰り返すわけです。これを二回繰り返して、次に津

すが、一方で人々はそこに住み続けています。釜石は風光明媚で海の幸が美味しく、恵みの多い良いところですが、この釜石に住み続けるためには次の条件があります。

まず、五〇年から一〇〇年に一回ある大きな津波をやり過ごさなければなりません。この地域に住み、土地の恵みを受け続けるためには、この津波という災いをどうやってやり過ごすか、この知恵を持っていないと釜石に住んではいけないということだと思えます。この知恵が黙っていても親から子へ、子から孫へと世代間で自動的に継承されていくような社会の仕組みの事を「災害文化」というのだと思うのです。これはそ

んなに難しいことではありません。例えば、津波に備える知恵とは「揺れたらいち早く高台へ避難する」、これだけなのです。

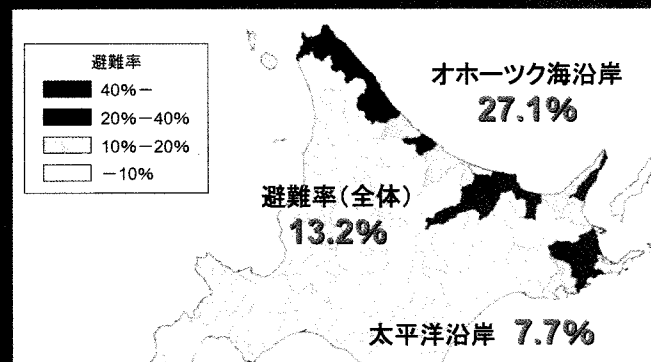
しかし、実際にはこれがなかなか伝わりません。例を示しますと、平成一八年に千島列島沖のあたりを震源地とする大きな地震があり、津波警報が出ました。揺れは殆んどなかったのですが、この時の地域の避

波警報が出た時にどう思うかというところ、つまり、この前も大丈夫だったから逃げるのをやめておこう」と思うのです。すると、案外大丈夫なんです。よく外れますから。

「逃げなくて良かった」、「逃げなくて良かった」を何度も繰り返して、そして最後の一回だけ「逃げておけば良かった」となるわけです。この最後の一回となった段階でこの人は亡くなっています。これは人間の性との戦いみたいなものです。では、このおじいちゃんはどうあるべきなのでしょう。それは、とにかく逃げておいて「津波が来なくて良かったなあ」とにやかな顔に戻れるかどうかですね。これを繰り返していれば、このおじいちゃんとお孫さんは、「やっぱり逃げていて良かったな」という最後の一回を勝ち取れるのです。

「また外れよった。行政の言うことはあてにならないな。津波警報なんていい加減だからな」と思うのか、または、とにかく逃げておいて「ここに住むからには津波と付き合わなければいけない。だから逃げるんだ。逃げたけど津波が来なくて良かったな」と思えるのか。最後に難を逃れられるかどうかは、たったこれだけの心の違いに

北海道各地の避難率(H18.11.15)

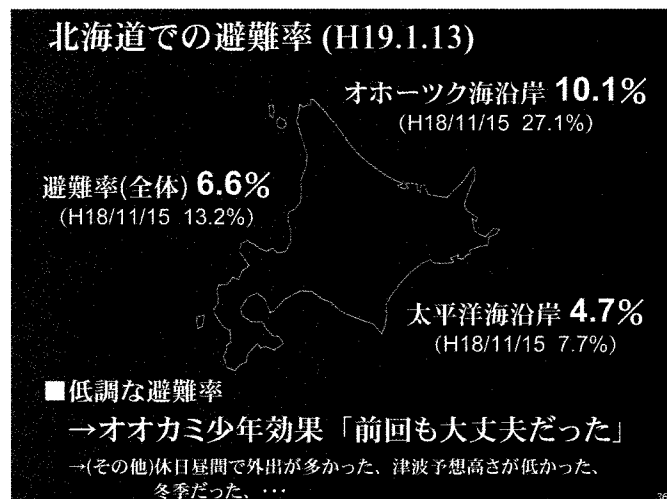


- 太平洋沿岸の低調な避難率・・・オオカミ少年効果
- オホーツク海沿岸は比較的高い避難率・・・初めての津波警報、直前の低気圧災害や竜巻

図1

あるのです。そして、このおじいちゃんが孫にどう言うかによって、この孫がこの地で生きてくうえで術を身に付けるか付けられないかの大きな違いが出てくるのです。このようなおじいちゃんの一言というのは、非常に大事な意味を持っています。こういった災いをやり過ごす知恵が、脈脈と地域に受け継がれているかどうかの重要なポイントがここにあるのです。(図2、3参照)

図2



「そのときは避難すればよい」と思っている人が、そのときに避難できるはずがない

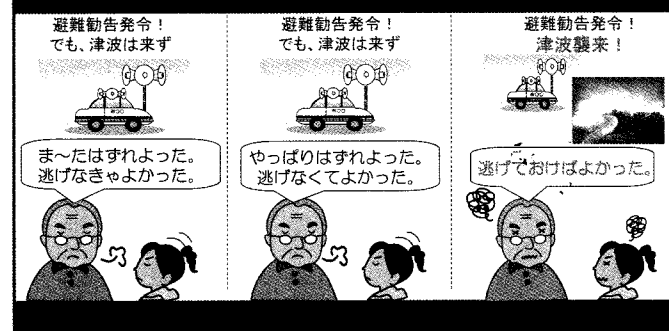


図3

地域に定着した災害文化とは？



図4

まずは子どもたちに教えています。小学生に過去の津波の話をする、「先生、僕は絶対に逃げるよ」と言ってくれらるんですね。そこで僕は、子どもたちの教育の最後「先生は君たちが絶対に逃げてくれるのは分かっている。だけど君たちが逃げた後に、君たちのお父さんやお母さんはどうしているのかを考えてみなさい」と言います。すると、子どもたちは不安な顔をして「先生、僕は逃げるけれど、お父さんやお母さ

んは絶対に僕を探しに来る」と答えながら、その時に彼らは「お父さんやお母さんが死んじゃうかも知れない」と気付くのです。そこで僕は、子どもたちに「うちに帰ったら僕は絶対に逃げるからお父さんとお母さんも絶対に逃げてね」とお父さんやお母さんが信じてくれるまで言ってくれ」と伝えました。すると、子どもたちは家庭で一生懸命にそう言ってくれたのです。実際に津波警報が出た時にも、子どもたちは親

に「逃げよう。逃げよう」と言ってくれました。しかし、この教育を始めて間もないときに津波警報が出たものですから、十分に親は子どもたちの言うことを聞いてくれず、「いやいや、大丈夫だ」ということで、実際にはうまくいかなかったということもありました。

このように私たちは今、「子どもたちに教育をする」と同時に「子どもを介してお母さんや家庭の中での防災を進める」ということに取り組みしています。具体的には、小学生に対する取り組みをはじめの際に、アンケートを一問だけ出しました。「君が一人にいるとき大きな地震が発生したら君はどうしますか」と。大半の子どもは、「お母さんに電話する」や「誰かが帰ってくるまで待つ」という回答でした。

そして次に、子どもの回答の上にお母さんに対するアンケートを一回つけたうえで、アンケートを家に持って帰らせて、お母さんに見てもらいました。「自分のお子さんの回答を見てください。あなたのお子さんは、この次の津波のときに生き延びる事ができるお子さんですか？」と聞いたのです。するとお母さん方はこの時初めて「ハッ

と気付くのですね。「このままではまずい」と。お母さんは自分の子どもを見つめることによって、自分の家庭の安全ということを考えるようになったのです。こうして「子どもを介して家庭の安全を広める取り組み」を展開していきました。

ところで、東北地方には「津波でんでんこ」という言葉があります。これは「津波が来たらでんでんばらばらに一人ひとり逃げなさい」という意味を持っています。こ

れは先程もお話しした田老町などでは、一度逃げた人が「子どもがいない」、「おばあちゃんがいらない」ということで、戻る途中で亡くなっています。ですから、この言葉はそういった意味での「一人ひとり逃げなさい」ということを教えています。

しかし、例えば「瓦礫の下の子どもを残してお母さんが逃げられるか」というと実際には逃げられません。「津波でんでんこ」は、実際できないことが多いのです。では、「津波でんでんこ」の本当の意味は何かというと、「自分の命は自分で責任を持つ」ということです。

あとは、これを地域に広げることなのです。母と子どもで一緒に通学路を歩いてもらいながら「ここで地震があったらどうするか」「避難場所を相談しながら家まで帰ってもらいました。その時、どうしても近くに高台がなく、逃げる場所がない場合は、近くのお宅に「うちの子どもが自宅に参りますので一緒に逃げてやってください」ということをお願いするようにしました。これは「津波避難の家」と言いますが、「子ども一〇番の家」のような制度を作ったわけです。(写真参照)

(写真参照)

学校での防災教育 (岩手県釜石市)



写真

まずお母さんが「自分の子どもが絶対に逃げてい」ということを信じられること。そして、子どもも「お母さんも逃げていて、後で絶対に探しに来てくれる」ということが分かっていくこと。そういう家庭を求めているわけです。一人ひとりがそれぞれの命に責任を持ち、そして、それをお互いに信じあえるというような家庭環境であること。そんなことを求めているのが「津波でんでんこ」という言葉であり、津波被害の厳しいところゆえに、このような言葉で伝えようとしているということです。

この制度は、もちろん子どもたちの安全を守るといことが目的ですが、「津波避難の家」に登録された家々は「津波警報が出て、自分ひとりでは逃げないかも知れないけれども、よそ様の子どもを預かることになったからには自分も避難する」ということとなるわけです。このように「子どもたちの安全ということを中心に命を守る取り組みを家庭や地域に広げる」ということを今、始めているところです。

以上で話を終わります。ご静聴ありがとうございました。